

南条殿御返事

弘安四年九月一日 六〇歳

塩一駄・大豆一俵・とっさか一袋・酒一筒給ひ候。上野国より御帰宅候後は未だ見参げんざんに入らず候。床敷存じ候ひし処ゆかしくに、品々の物ども取り副そへ候ひて御音信おとずれに預かり候事申し尽くし難き御志にて候。

今申せば事新しきに相似て候へども、徳勝童子とくしょうは仏に土の餅を奉りて、阿育大王と生まれて、南閻浮提を大体知ちぎょう行すと承り候。土の餅は物ならねども、仏のいみじく渡らせ給へば、かくいみじき報むくひを得たり。然るに釈迦仏は、我を無量の珍宝を以て億劫の間供養せんよりは、末代の法華經の行者を一日なりとも供養せん功德は、百千万億倍過ぐべしとこそ説かせ給ひて候に、法華經の行者を心に入れて数年供養し給ふ事有り難き御志かな。金言の如くんば定めて後生は靈山浄土に生まれ給ふべし。いみじき果報かな。

其上此ところの処は人倫を離れたる山中なり。東西南北を去りて里もなし。かゝるいと心細き幽窟ゆうくつなれども、教主釈尊の一大事の秘法を靈鷲山にして相伝し、日蓮が肉団の胸中に秘して隠し持てり。されば日蓮が胸あいたの間は諸仏入定にゅうじょうの処なり、舌の上は転法輪ころんの所、喉のんどは誕生の処、口中こうちゆうは正覺しょうがくの砌みざりなるべし。かゝる不思議なる法華經の行者の住処なれば、いかでか靈山浄土に劣るべき。法妙なるが故に人貴し、人貴きが故に所尊しと申すは是なり。神力品に云はく「若しは林中に於ても、若しは樹下に於ても、若しは僧坊はつに於ても、乃至般涅槃のぞしたまふ」云云。此の砌に望まん輩やからは無始の罪障たちま忽ち消滅し、三業の悪転じて三徳を成ぜん。彼の中ちゆうてんじく天竺むねちの無熱池のうしゃに臨みし惱者が、心中じゆうの熱氣じゆうまんを除愈ごして充満がんによしょうりよう其願ち如清涼池ひしとうそぶきしも、彼此異なりといへども、其の意こころは争いかでか替かはるべき。彼の月氏の靈鷲山は本朝此の身延みねの嶺はるなり。参詣遥かに中絶せり。急ぎ急ぎらいりんに來臨くわだを企あわつべし。是にて待ち入あわつて候べし。哀れ哀れ申しつくしがたき御志かな、御志かな。

弘安四年九月十一日

日蓮花押

南条殿御返事

御使ひの申し候を承り候。是の所しよろう勞難儀りようじのよし聞こえ候。いそぎ療治りようじをいたされ候ひて御参詣有るべく候。